「活用語カナ」型詠嘆表現の衰退について

近　藤　要　司

On the Decline of Exclamatory Expressions by the Particle "KANA" Placed after Adjectives or Verbs

Yoji KONDO

1．はじめに

この論文では、中世以後急速に衰えていく活用語に終助詞カナが下接する文型（以下「活用語カナ」とする）の衰退の原因を考察する。そのために、中古の『源氏物語』の用例と院政期の『今昔物語集』の用例を比較検討している。そして、衰退にいたった要因が、中古の活用語カナが形容詞・形容動詞[1]を中心とした話者の内面の情動そのものを述べることを主眼とする特別な構文であったものが、院政期では、話者の情動ではなく、原因となる出来事を描くことを主眼とする表現に変化し、表現としての特色を失ったことにあることを報告するものである。

2．1　活用語カナの衰退について

古代語の終助詞「かな」は、「あはれなるわざかな」のように体言に下接して感動喚体句を構成する場合と、「惜しくもあるかな」のように、通常の文の形式をとったものの述語の後に付く場合の二つがある。このうち、前者の「あはれなるわざかな」のような体言下接の「かな」は、中古以後も活発に用いられる。

一方、活用語に「かな」が下接する形式（以下「活用語カナ」と呼ぶ）は、浅見（1969）が「用言につく例は、一般には室町時代以降には見られず、詠嘆の終助詞「かな」の終息の一つの時期を暗示する。そして、近世俳諧には終止形につけた例もある。」としているように、室町時代以降にはほとんど見られなくなる。

表１は、『源氏物語』と「今昔物語集」の終助詞カナについて比較した表である。[2] この表で終助詞カナの総数を比較すると、『源氏物語』671例に対して、『今昔物語集』267例というように、終助詞カナの総数も『源氏物語』に比較して『今昔物語集』では約４割に落ち込んでいる。しかしながら、体言カナは７割近くあり、減少が著しいのは活用語カナの方であることがわかる。活用語カナは、『源氏物語』の２割以下に落ち込んでいるのである[3]。

表１．『源氏物語』と『今昔物語集』のカナの用例数の比較

	「かな」の総数	体言下接「かな」	活用語下接「かな」	
			総数	和歌以外
源氏物語	671	314	358	303
今昔物語集	267	209	59	50
「源氏物語」を１とすると	0.4	0.67	0.16	0.17

室町時代以後、散文には見られなくなる活用語カナのその衰退の兆しはすでに院政期に表われていたのである。

ここで考えるべきことは、体言下接の「かな」については、まだ用例数が多いのに、なぜ活用語「かな」のみが衰退するのかという問題である。

この問題に答えるためには、『源氏物語』『今昔物語集』のそれぞれの活用語下接「かな」がどのように使われたのか、比較検討する必要がある。

２．２　資料について

本稿では、国立国語研究所（2021）『日本語歴史コーパス』（バージョン2021.3，中納言バージョン2.5.2）https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/（2022年１月６日確認）を利用した。このコーパスから、『源氏物語』全巻、『今昔物語集』（巻11、12、13、14、15、16，17，19，20，22，23，24，25，26，27，28，29，30，31）の

終助詞「かな」の用例をダウンロードした。さらに、個々の用例については、『小学館新編日本古典文学全集』の注などを参照した。『源氏物語』については、他に『CD-ROM　角川古典大観　源氏物語』のデータも利用した。

なお、各例文には、参考として、『小学館新編日本古典文学全集』の口語訳をつけた[4]。『源氏物語』と『今昔物語集』の用例に「20-p.243」のようにあるものは、当該用例の『小学館新編日本古典文学全集』における所在を示したもので、ハイフンの前が、『小学館新編日本古典文学全集』の巻数で、あとがページ数である。

2.『源氏物語』と『今昔物語集』の活用語カナの比較

2．1　活用語カナの表現類型の分類

『源氏物語』の「活用語カナ」では、以下のようなものがその典型である。

（1）いで、あなうたてや。ゆゆしうもはべるかな。聞こえさせ知らせたまふとも、さらに何のしるしもはべらじものを」（若紫）（20-p.243）

（幼い紫の上といっしょに奥に行こうとする源氏に紫の上の乳母が）「まあ困ってしまいます。あまりでございますわ。何をお言い聞かせなさっても、何のかいもございませんでしょうに」

情意評価の語「ゆゆし」が述語となっていて、その述語の内部に詠嘆「も」が割って入っている。つまり、情意評価の語が表現の中核を占めているものが『源氏物語』の活用語カナの典型なのである。[5] そこで、この情意評価の語のありかたを基準として、４つの類型を立てる。[6]

類型１　情意評価を表す形容詞述語＋終助詞「かな」

上の例のような用例である。（1）では、「形容詞連用形＋詠嘆「も」＋あるかな」の形になっているが、詠嘆「も」が述語の外にある「～詠嘆「も」＋形容詞連体形＋かな」という形になったものや詠嘆「も」の無い用例もある。

類型２　情意評価の形容詞で修飾された形式名詞述語＋終助詞「かな」

（２）心づくしなることにもありけるかな。（夕顔）（20-p.159）

（源氏が夕顔に）「まだこのようなことははじめてなのだけれど、いろいろと気のもめるものですね。」

この類型は述語部分が「形式名詞＋断定なり＋かな」という形式になっている。この類型の多くは、上の例のように、「断定ナリ」にさらに詠嘆「も」が割って入り、「形式名詞＋に（断定ナリ連用形）＋詠嘆「も」＋ある＋なか」の形になっている。この「あり」が敬意を含んだ「はべり、おはす、おはします」となった例もこの類型に含める。

類型３　情意評価の語を連用修飾語とする動詞述語＋終助詞「かな」

（３）あさましうも疎ませたまひぬるかな。まことに心深き人はかくこそあらざなれ。」（薄雲）（21-p.463）

（斎宮の女御が源氏の恋情をうとましく思っているのを感じ取って）「情けなくも私をお嫌いになったものですね。真実考え深い人なら、こんな目にあわないでしょう

この例では「あさまし」という評価を示す形容詞が連用修飾の位置に立って、「（斎宮女御が源氏を）疎ませたまひぬ」という述語を修飾している。類型１・２とは異なり、「かな」の文の中に、話者の内面の情動のみならず、その情動の機縁となった出来事も示されていることになる。

類型４　連体修飾の情意評価の語を持つ動詞述語＋終助詞「かな」

（４）「あないみじ。心憂きめを見せたまふかな」（葵）（21-p.39）

（源氏が臨終の床にある葵の手をとって）「ああ情けないこと。この私につらい思いをおさせになるのですね。」

「心憂し」という話者の情意示す語が「めを見せたまふ」の「め」を連体修飾している。類型１・２・３と異なって、情意評価の語が主文を直接構成する要素ではないが、カナの文に込められた話者の情意評価は文中に明示されている。

このような類型１～４に分類できないものもある。これは特徴がはっきりしないので「分類他」とした。

以下、『源氏物語』と『今昔物語集』の「活用語カナ」の用例を類型ごとにみていくことにする。

２．２　『源氏物語』の活用語カナの諸類型

前節で提示した１～４類型および、その他という基準に従って、『源氏物語』の活用語カナについての分類結果を示す。

２．２．１　類型１　情意評価を表す形容詞述語＋終助詞「かな」

『源氏物語』には、類型1に属する例が、109例見られる。『源氏物語』の活用語カナの全用例の３分の１を占める。

３．１に挙げた例の他に以下のようなものがある。

（５）「あぢきなうもあるかな。戯れにても、もののはじめにこの御事よ。（若紫）（20-p.249）

（紫の上に求婚した源氏が肝心な時に来ないと聞いて女房が）「情けないことではありませんか。かりそめにせよ、ご縁組みの始めにというのに～」

（６）いかにせまし、戯れにくくもあるかな、忍びてや迎へたてまつりてまし（明石）（21-p.251）

（源氏が京都に残した紫の上を案じて）「どうしたものだろう。冗談ではすまされぬ恋しさとはこのことだ。いっそのこと、こっそりと呼び迎えてしまおうかしら。」

これらの例は、詠嘆「も」が述語である情意評価の形容詞に割ってはいり、「形容詞連用形＋も＋あり」という述語を形成している。このように、詠嘆のモが述語を二つに割っている例が、類型1の大半92例を占めている。

詠嘆のモが述語内部に割って入らない「形容詞連用形＋あり」の例もある。

（７）「かれ見たまへ。おのれ独りも涼しげなるかな」とのたまふに、（若菜下）（23-p.245）

（源氏が病床にある紫の上に）「あれ（蓮の花）をごらんなされ、蓮が自分ひとり

涼しそうにさいているではありませんか」

類型１には、他に詠嘆「も」が無い例もあるが17例にとどまっている。

（８）「心地のいみじうなやましきかな。やがてなほらぬさまにもありなむ、いとめやすかりぬべくこそ。（夕霧）（23-p.421）

（夫柏木の死後から夕霧に求愛されて心痛を抱えた落葉の宮が）「気分がひどく悪いのです。このまま治らないようなことになったら、そのほうがいやな噂も立たず見苦しいこともなかろうに、～」

（９）のたまふ声の、いみじくらうたげなるかな（宿木）（24-p.427）

「～とおっしゃる女君の声が、なんと愛らしいことか」

２．２．２　類型２　情意評価の形容詞で修飾された形式名詞述語＋終助詞「かな」

これは、「形式名詞＋なり」を述語とする活用語カナの文である。『源氏物語』に36例見られる。

（10）～まづいとめづらかなることにもはべるかな。かねて例ならず御心地ものせさせたまふことやはべりつらん（夕顔）（20-p.171）

（夕顔の急死の後、腹心の部下惟光が源氏に）「惟光が源氏に「何はさておき、じつに異常なことでございますな。前からご気分がおわるいということがございましたのでしょうか」

（11）誰ならむ。いとめざましきことにもあるかな。（紅葉賀）（20-p.334）

（紫の上のうわさを聞いて、正妻葵の女房たちが）「いったいどういうなのだろう。じつにけしからぬことではありませんか。」

これらの例は、体言にカナがついた感動喚体句の例と似ている。近藤（1997）に述べたように、『源氏物語』の「かな」の感動喚体句の多くも、情意評価の語が形式名詞を連体修飾した形なのである。

（12）いと、わりなきわざかな（桐壺）（20-p.37）

「ほんとに是非もないことですね。」

（13）さもやありけむ。いみじかりけることかな（帚木）（20-p.108）

「そういうこともあったのだろうか、これはえらいことだった」

活用語カナの場合には、述語が「断定ナリ連用形ニ＋アル＋カナ」となっていて、この連用形ニにすべて詠嘆「も」が付いている。[8]

2．2．3　類型3　情意評価の語を連用修飾語とする動詞述語＋終助詞「かな」

類型1と類型2は、情意評価を表す形容詞そのものが述語の中心であった。そして、そのような情意や評価の念を話者が持つようになる機縁となった出来事は、あまり明確には示されないことが多い。一方、類型3では、活用語カナの文が全体としては、機縁となった出来事を語る文として構成され、話者が抱いた情意や評価の語は、連用修飾の形で添えられている。このような類型は99例と『源氏物語』の活用語カナの中では類型1についで多くを占めている。

（14）常よりも優にも書いたまへるかな、とさすがに置きがたう見たまふものから（葵）（21-p.51）

（六条御息所の手紙を見て源氏が）「常にもましてみごとにお書きになったものよ」と、さすがに下に置きかねる気持ちで御覧になるものの）

（15）右近、いとゆゆしくも言ふかなと聞きて（玉鬘）（22-p.111）

（事情を知らない女房が姫君の将来について「受領の妻に」と祈っているのを聞いて）「右近はまったく忌まわしいことを言うものよと思って」

これらの例では、カナの文は「御息所が手紙を書いてよこした」「近くにいた女房が発言した」という出来事を語る内容になっている。このような出来事を契機として話者の内面に感情や評価が生ずるのだが、類型3では、類型1・2とは異なり、そのような生起した事態を述べる形を取り、話者の情意や評価は、述語に対する連用修飾として示されている。

これらの用例では、情意評価の形容詞の連用形の後に詠嘆「も」が置かれているのが普通であり、65例はそのような形になっている。

一方、詠嘆「も」がない例も28例と無視できない用例数がある。

（16）かしこく教へたつるかなと思ひたまへて（帚木）（20-p.73）

（馬頭（うまのかみ）の思い出話の中で、嫉妬深い女に対して）「我ながらうまく訓戒したものだと思いまして」

（17）いときよらにねびまさりたまひにけるかな。（朝顔）（21-p.471）

（老女女五の宮が源氏の来訪に感激して）「ほんとにご立派に成人あそばしました

2．2．4　類型4　連体修飾の情意評価の語を持つ動詞述語＋終助詞「かな」

類型4は、類型1・2・3のように、情意評価の語が述語になったり、述語を直接連用修飾しているわけではない。言わば文の部分品である連体修飾語として示されている類型である。部分品ではあるが、話し手の情意評価はそれなりに示されている。このような類型は、『源氏物語』には33例ある。

（18）「いとまがまがしき筋にも思ひよりたまひけるかな。いたり深き御心ならひならむかし。（藤袴）（22-p.337）

（源氏の玉鬘に対する気持ちを追及する夕霧に）「じつに忌まわしいことを邪推なさったものだね。隈々まで気をまわしすぎるご性分のせいだろうな。」

この例では「（夕霧の）思ひよりたまひけるは、いとまがまがし」という源氏の評価が「筋」という名詞を修飾する連体修飾として用いられている。類型3を用いた「いとまがまがしくも思ひよりたまひけるかな」と比較すれば、源氏の夕霧の考えについての評価がやや婉曲に示されていることになる。心話ではなく、直接相手に語る言葉であるだけに、配慮が働いているのだろう。

この類型4でも半分近くは、上の例のように詠嘆「も」が情意評価の語の直下というべき位置に置かれている。

一方で半数は、詠嘆「も」がない例である。

（19）ありありて、をこがましき名をとるべきかな、と思しめぐらす。（夕顔）（20-p.170）

（源氏が自分の行為を思って）（所詮、愚か者の汚名をこうむるほかないのか」とあれこれ思いめぐらしなさる。

このように、類型1，2，3と比較すると文中に詠嘆「も」を置かない例の比率が増していることも、類型4の特徴である。それは、情意評価の語が主文の

直接の構成要素ではなく、間接的な連体修飾語であることと連動してそれだけ、類型4は『源氏物語』における活用語カナの典型からは遠ざかっているということになる。

2．2．5　類型他　類型1～4に当てはまらないもの

以下にあげるものは活用語カナの典型としてあげた情意評価の語が示されるという形から外れた例である。ここに分類される例は、26例あり、無視できないのであるが、『今昔物語集』の用例との関連性は薄いので、用例を4例あげるのみとする。詳細は近藤（1987）および西田（2013）を参照してほしい[9]。

詠嘆「も」を含む例（14例）

（20）こなたはあらはにやはべらむ。今日しも端におはしましけるかな。（若紫）（20-p.212）

（源氏の一行が宿近くに来ていることを知った僧都が妹の尼に）今日（源氏一行が来ている日）にかぎって、端近な所においでだったのですね。

（21）身にもしみけるかなと思ひつづけて（少女）（22-p.49）

（幼なじみの恋人雲居雁とあえなくてさびしいという和歌のあとの夕霧の独白）「つらさが身にしみることよ」と思い続けて。

詠嘆「も」を持たない例（12例）

（22）心ばせのなだらかにねたげなりしを、負けてやみにしかな、とものをりごとには思し出づ。（末摘花）（20-p.298）

（源氏が空蝉との恋愛を回想して）「あちらは気立てがおとなしく、いまいましいくらいしっかりしていたので、とうとうこちらの負けで終ってしまったのだったな」と何かの折ごとにはお思い出しになる。

（23）「ここにものしたまふは誰にか。尋ねきこえまほしき夢を見たまへしかな。今日なむ思ひあはせつる」（若紫）（20-p.212）

（源氏が紫の上の一族の僧都に）「こちらにいらっしゃいますのはどなたですか。お尋ね申してみたい夢を見たことがございました。今日はこちらにまいって思い当たりましたので」

2．2．6　『源氏物語』の「活用語カナ」のまとめ

類型１～４までと類型にあてはまらない類型他を見てきた。『源氏物語』の「活用語カナ」の典型はやはり、類型1であろう。特に「情意評価の形容詞連用形＋詠嘆「も」＋あるかな」が『源氏物語』の「活用語カナ」の典型といってよいであろう。

2．3　『今昔物語集』の活用語カナの諸類型

はじめに述べたように、『源氏物語』に比べて、『今昔物語集』の活用語カナはずいぶん用例数が減っている。『源氏物語』では体言カナ314例に匹敵する303例（和歌以外）であったが、『今昔物語集』では、体言カナ209例に対して、50例（和歌以外）と用例数としても対体言カナの比率としても激減している。これを先の『源氏物語』と同じような類型に分類してみてみる。[10]

類型１　情意評価を表す形容詞述語＋終助詞「かな」

類型１は、11例ある。『源氏物語』に比べて類型1の比率はかなり減少している。

（24）此く御はし値ひたる事、契り深く哀れにも有けるかな（巻15・第39（36-p.115）

（源信僧都母を看取る話。母尼が）「このようにおいでくださったことは、前世からの親子の契りが深いことで、ありがたいことですね。

（25）何ち行にか有らむ。怪くも有かな（巻19・第19（36-p.519）

（僧が山で道に迷って）「いったいどこに行くのだろう。おかしなことだ」

上に示した用例二つは、詠嘆「も」が述語の内部に割って入る形になっている。この形式は『源氏物語』では、90例以上あり、類型１の大半を占めているのだが、『今昔物語集』では、５例と半数以下にとどまり、残り6例は以下のように詠嘆「も」がない例である。

（26）我れ年老て心細く思つる間、かく伝へて奉る事、喜ばしきかなや」

（巻11・第28）（35-p.127）

「わたしは年老い、心細く思っておりましたので、かようにお譲り申すことは、まことに喜ばしいことです。」

（27）「今夜怪きかな。例にも非ず人間の気有る聞有り。誰人の来れるぞ（巻第13・第1）（35-p.290）

（鬼の中の主立った者が）「どうも今夜はおかしい。何だかいつもと違って人間の匂いがする者がいる。何者がやって来たのか」

2．3．2　類型2　情意評価の形容詞で修飾された形式名詞述語＋終助詞「かな」

『今昔物語集』には類型2に相当する用例が見当たらなかった。類型1類型2は、遭遇した出来事に対する話し手の気持ちや評価を表す語が文の述語を構成するものであるが、この2つの類型が大きく数を減らしていることは『源氏物語』の場合との大きな違いである。

2．3．3　類型3　情意評価の語を連用修飾語とする動詞述語＋終助詞「かな」

類型3は『今昔物語集』に17例ある。用例数でみるとわずかだが、類型3の比率としては『源氏物語』の約33%に対して、『今昔物語集』34%と大きな違いはない。

（28）愚にも問ふかな。彼の軍の持つる刀剣を以て、汝が身をば先づ二百に切り割（さき）て、各々一切づつ取らむとす。（巻14・第29（35-p.473）

（地獄に落ちた人が地獄の使いに自分がどうなるかと問うと、使いの者は）「愚かなことを聞くものだ。あの軍兵の持っている剣で、お前の体をまず二百に切り裂き、軍兵がその一切れずつをとるだろう」）

（29）蛇持の云く、「怪くも宣（のたま）ふかな。其を役にして、要し給ふ人に与へて、其の直を以て衣食と成すなり（巻16・第15（36-p.202）

（蛇を持つ男がそのわけを尋ねられて）「おかしなことを言われますな。如意作り

を専業にしてお入り用の方に与え、その価で衣食を求めているのです」

類型３では、上の例のように、情意評価形容詞の連用修飾部に詠嘆「も」が下接する例が半数の９例あるが、のこり６例が詠嘆「も」が文中にない例である。[11]

（30）「怪しく心細く思ゆるかな」（巻16・第20）（36-p.227）

（不審な男の家に泊まって、不安な一夜を過す若夫婦が）「何か怪しく心細い思いがすることだ」

（31）女房の気色いとにて「いと悪しくし給ふかな」と云て、（巻27・第22、）（38-p.75）

（あやしげな女は約束どおりに箱を渡さなかった男に）女房はひどく不興気な顔つきで、「とんでもないことをなされましたな」と言って

類型１・２のような情意や評価の語を表現の中心に据えた活用語カナは『今昔物語集』では不活発になるのだが、出来した事態を描きつつ、情意や評価についても明示する類型３は比率そのものでは『源氏物語』と変わらない。

２．３．４　類型４　情意評価の語を連体修飾あるいは準体句として文中にもつもの

類型４は、『今昔物語集』に18例ある。用例数そのものは『源氏物語』の半分なのだが、活用語カナの中での比率でみると、『源氏物語』の類型4は11％程度で、『今昔物語集』は36％と倍増している。

（32）「吉き所にも宿りぬるかな。此広くて吉し」と云ひ合たり。（巻16・第7）（36-p.174）

（宿を借りた人が）「いいところに宿をとったものだ。広々としてぐあいがいい」と言い合っている。

（33）翁、「由無き事をも云てけるかな」と思て（巻16・第16）（36-p.208）

（翁が蛇に娘をやる約束をしてしまい）「ああつまらないことを言ってしまったものだ」と思いながら

上の例のように、詠嘆「も」が、情意評価の語で連体修飾を受けた名詞句の

直下にあるものが、15例と大半を占める。詠嘆「も」がないものが3例ある。

(34)「なほ、搦得(からめえ)ざる也」と云へば、「怪き事を申すかな。我れ搦めむ」と云て(巻14・第42)(35-p.510)

「やはり捕まえることができません」と答えたので、「おかしなことを言うものだ。それなら、わしが引っつかまえてやろう」と言って

(35)〜運の尽給たるとは云ひ乍ら、弊き死にし給ぬるかな」(巻25・第4)(37-p.402)

(郎等達が大声で)「〜運が尽きなさったとはいいながら、情けない最期を遂げられたものだ。

このように『今昔物語集』では、類型3と類型4を合わせて、35例あり、全体の3分の2以上を占めている。『源氏物語』では類型3も数多いのであるが、類型1類型2が半数近くを占めている。このように、類型別の分布については『源氏物語』と『今昔物語集』とでは大きな違いがあるのである。

2．3．5　類型他に分類されるもの。

『今昔物語集』では3例[12]だけである。全例を示す。

(36)「墓無き事を云ふに付ても道心有るかな」とぞ思(おぼ)えける。(巻15・第42)(36-p.122)

(女房達には)「ほんのちょっとしたことを言うにつけてもほんに道心の深い方だなあ」と思われるほどだった。

(37)「我が祖の生返て御したるなむめり」となむ思ふ。恥を隠しつるかな」と云て、泣けば(巻16・第7)(36-177)

(無き主の娘が従者の娘に)「これはどうしたことでしょう。「両親が生き返っておいでになったのかしら」と思われます。ほんとに恥をかかずにすみました。」と言って泣くと

(38)頬つき面様我が妻に似たるかなと見けるのみぞ、然にや有らむと思えける。(巻29・第3)(38-296)

(女に言われるままに盗賊の手伝いをしていると、あるとき女が消えてしまった。

追憶の中で盗賊の首領の顔を思い出して）たいまつの火影に透かして見ると、男の顔色とも思われるほど、たいそう白く美しく、その目鼻立ちや面差しが自分のつかにそっくりだなあとみえたことだけが、あるいはそうではないかと思われたのであった。

（36）は、「道心ある」を情意評価と考えて、類型1に分類すべきかもしれない。（37）「恥を隠しつるかな」（38）「頬つき面様我が妻に似たるかな」の2例が残るが、どちらもこの2例以外は、動詞文で文中に詠嘆「も」が無い。このような用例も『源氏物語』と比較するとごく少数の例にとどまっており、活用語カナの用例の減少に伴い、このような例外的な用例も数を減少させているのである。

2．3．6　『今昔物語集』の活用語カナのまとめ

『今昔物語集』の「活用語カナ」は衰退の途上にあり、と思われる『源氏物語』と比較して、用例数は6分の1に落ちている。そして、情意性の表現が文の中心となる類型1や類型2の比率が『源氏物語』と比較すると大きく減少しているのである。

3．『源氏物語』と『今昔物語集』の比較

3節で、『源氏物語』と『今昔物語集』の活用語カナの用例を類型別に見て、用例数やその特徴を述べてきた。以下、両者を比較対照して考察を進める。

3．1　類型ごとの変遷

表2は、類型ごとの用例数と、それぞれの資料中の活用語カナの中での割合を示したものである。

1節に述べたように用例数自体も『今昔物語集』は『源氏物語』のほぼ6分の1となっているが、類型ごとの割合も大きく変化している。

まず、類型1は『源氏物語』36%に対して、『今昔物語集』22%と大きく減少している。また、類型2の割合が『源氏物語』約12%あったのに対して、『今

昔物語集』ではまったく見られなくなっている。

類型１は、形容詞述語文であり、類型２は、述部が形容詞で連体修飾された形式名詞である。どちらも、形容詞が述語を形成している用例である。類型１・類型２両者の数を合わせてみると『源氏物語』145例（48%）、『今昔物語集』12例（24%）と、『今昔物語集』では比率が半数以下に減少しているのである。

表２．源氏と今昔の「かな」の類型別の比較

	源氏物語		今昔物語集	
類型１	109	36.00%	12	24.00%
類型２	36	11.90%	0	0%
類型３	99	32.70%	17	34.00%
類型４	33	10.90%	18	36.00%
類型他	26	8.60%	3	6.00%
総計	303	100.00%	50	100.00%

『源氏物語』では類型１と２即ち形容詞が述語の主体を担うものが半数近くを占めるのにたいして、『今昔物語集』では、４分の１程度に減少している。

近藤（1997）に述べたように、『源氏物語』の体言カナ（感動喚体句）と、ここで扱った活用語カナの共通点は、情意評価を示す語が文中に存在することである。その中で、今回整理した類型１・類型２は、その情意評価を示す形容詞が文の中心である述語部分に置かれている。このことは、『源氏物語』の活用語カナの大きな特色である。これが、『今昔物語集』で大きく比率を落としているということは、形容詞による情意評価がこの活用語カナの表現の中心から一歩後退したことを示している。

類型１や類型２と比べると、類型３については、『源氏物語』と『今昔物語集』でほとんど比率には変化が無い。

類型４は、比率で見ると、『源氏物語』は全体の11%程度にとどまるのに対して、『今昔物語集』は36%にのぼっている。『源氏物語』では、類型１に対して３分の１なのだが、『今昔物語集』では、11例に対して18例と、類型４の方が多くなっている。

類型他『源氏物語』の26例すべて動詞文である。『今昔物語集』は、例外とすべきものを除いた２例は動詞文である。

類型１と類型２が形容詞文として、類型３と類型４と類型他を動詞文とすると

『源氏物語』　形容詞文　145例（48%）　動詞文　158例（52%）
『今昔物語集』　形容詞文　12例（24%）　動詞文　38例（76%）

という比率になる。『源氏物語』から、『今昔物語集』への変遷の大きな特徴は、形容詞中心の表現が大きく減少していることである。類型3は、中間形態と考えて、これを除いてみると

『源氏物語』　形容詞文　145例（48%）　動詞文　58例（19%）
『今昔物語集』　形容詞文　11例（22%）　動詞文　21例（42%）

となり、『今昔物語集』の動詞文優勢の姿がより明らかになるのである。

3．2　詠嘆のモ

詠嘆のモの有無については、『源氏物語』も『今昔物語集』もそれほど比率として大きな差は無い。

表3．詠嘆「も」の位置の比較

	源氏物語		今昔物語集	
1直下モ	210	69.30%	29	58.00%
2モ有	28	9.20%	3	6.00%
3モ無	65	21.50%	18	36.00%
総計	303	100.00%	50	100.00%

表3の「1直下モ」というのは、下の（39）のように、情意評価を表す形容詞の直下に詠嘆のモが置かれている例である。類型4の場合には、（40）のように、連体修飾を受けた名詞句に詠嘆「も」が直結している例である。

（39）あいなくものたまふかなと思せど（澪標）（21-p.312）

（六条御息所から「我が娘を恋愛の対象にしてくれるな」と言われて源氏は）「どうも工合のわるいことをおっしゃるものだと」とお思いになるけれど。

（40）奇異（あさまし）き態（わざ）をもしてむずるかな。今は我が身は限也けり（巻30・第8）（38-p.459）

（姫に恋をした男が、いつわりの用事で姫を呼び出し、思いをとげようとする）

「（自分は）大それたことをしでかすものだ。もうこれでおれはおしまいだ」

「2モ有」は、下の例のように、情意評価の語とは異なる語に詠嘆「も」が付いている例である。

（41）あやしう人に似ぬ心強さにてもふり離れぬるかなと思ひつづけたま

ふ。（夕顔）（20-p.195）

（空蝉は）どう考えてみても不思議なくらい普通の女には見られぬ気強さで振り切って行ってしまったものよ、と思い続けていらっしゃる。

表４．直下モの形態

	源氏物語		今昔物語集	
～もあるかな	129	61.40%	5	17.20%
～も動詞かな	65	31.00%	9	31.00%
～名詞句も～動詞	16	7.60%	15	51.70%
総計	210	100.00%	29	100.00%

表１では違いは明確ではないのだが、表４の「１直下モ」について、「～もあるかな」のように、詠嘆「も」の後ろには形式用言「あり」が続く用例、動詞が続く例などに分けてみると、『源氏物語』の詠嘆「も」の60%以上が、下の例のように「形容詞連用形」あるいは「形容詞連体形＋形式名詞」の後に「もあるかな」が付いた例であることがわかる。

（42）「うたて、ところせうもあるかな。いかに生ひやらむとすらむ」と削ぎわづらひたまふ。（葵）（21-p.28）

（紫の上の髪の毛を切りそろえながら源氏が）「いやにたくさんある御髪ではないか。これから先どんなにおなりだろう」と切りそろえるのにこまっていらっしゃる。

（43）大臣、「いとあはれに、めづらかなることにもはべるかな」と、まづうち泣きたまひて（行幸）（22-p.308）

（源氏から玉鬘（たまかづら）の存在を知らされた玉鬘の実父内大臣が源氏に）「まったく感に堪えぬ、まととないお話でございますな」と、まずお泣きになって

303例中の129例であるから、『源氏物語』の活用語カナの典型的な形式といえる。一方、『今昔物語集』にはこのようなタイプは、５例と17%を占めるのみとなっている。

つまり、『源氏物語』と『今昔物語集』の活用語カナの違いの一番注目される点は、この「形容詞連用形＋詠嘆「も」＋あり」の用例の多寡なのである。

３．３　「形容詞連用形＋詠嘆「も」＋あり」の衰退

中古における「～も～かな」は、上代の「～も～か（かも）」を引き継いだ形式と考えられる。以下、万葉集の類型１．２．３に当たるものを示す。

（44）見れど飽かずいましし君が黄葉のうつりい行けば悲しくも（喪）あるか（香）（万葉　3巻459）

「いくら見ても見飽きることなくご立派でいらっしゃった君が、黄葉の散り行くように亡くなってしまわれたので、悲しい事だ」）[13]

（45）なでしこが花取り持ちてうつらうつら見まくの欲しき君にも（母）あるかも（加母）（万葉20巻444）

「なでしこの花を手にして見るようにつくづくとお目にかかりたいあなたですなあ」[14]

（47）悔しくも（毛）老いにけるかも（鴨）我が背子が求むる乳母に行かましものを（万葉12巻2926）

「残念なことに年をとってしまいましたよ。あなたが求めている乳母にいけたらよかったのだけれど[15]」

これらの例について、川端（1963）では、このような例は「文節される述語が情意性形容詞乃至はそれ相当のものに大きく偏り、（1）[16] にあっても、情意的な連体修飾語句をもっていることは注意せられる」（p.30）としていて、上代において「～も～か（も）」が情意性形容詞を表現の中心に置くものであることを指摘している。

情意性形容詞による情意の表現は、情意の持ち主である話者と情意の契機となる事態、そして、情意そのものの三者からなるのだが、『源氏物語』の散文における活用語カナは、このような　『万葉集』の「～も～か（も）を引き継いで、情意そのものの再把握に大きく重心を置いた表現であったことになる[17]。特に「形容詞連用形＋詠嘆「も」＋あるかな」は、情意形容詞を述語の位置に置きつつ、さらに詠嘆「も」を添えることで、この部分が表現の眼目であることを強く示した構造になっているのである。

一方、『今昔物語集』の活用語カナは情意や評価を生じさせた事態そのものを描く方向に傾いている。それは情意への着目という上代の「～も～か（も）」中古の「～も～かな」が持っていた表現の重点を失いつつあったことの現れなのである。

『今昔物語集』においても類型3はなお健在といってもよく、「〜も〜かな」という表現形式自体は生き延びていくのであるが、類型1類型2の衰退は、「情意の深い再把握」からは遠ざかることを意味しており、このことが、活用語カナが衰退していく主要な原因だと思われる。

活用語カナは、上に述べたような詠嘆文のとしての特色を失えば、事態の生起を描く平叙文とほとんど違いがなくなる。「あはれなることかな」のような、文形式として平叙文と際だった違いがある「体言＋かな」がまだ命脈を保つのとはうらはらに活用語カナが滅びていくのは、表現の特色を失い、普通の平叙文と違いが無くなってしまったところにあるのである。

4．まとめ

本稿では、活用語に終助詞カナが下接した用例の衰退の実態について、中古の『源氏物語』と院政期の『今昔物語集』の用例の比較を行った。その結果、『源氏物語』から『今昔物語集』への推移の中で、一番目立った変化は、情意性形容詞を述語部分においた類型が大きく減少していることであった。特に「形容詞連用形＋詠嘆「も」＋あるかな」という『源氏物語』では典型とも言える類型が『今昔物語集』では大きく衰えていた。そのことは、活用語カナが自らの内面に生じた情意の深い再把握が表現の眼目であったところから、単に遭遇事態を描写する表現に移り変わってしまい、普通の平叙文と変わりのないものに変化してしまったところにあると結論づけた。

ここでは扱わなかった体言カナにも中古から院政期にかけて、何か内的な変化があったのかが注目されるので今後の課題としたい。

参考文献

浅見徹（1969），十三　かな―終助詞〈古典語〉,松村明編『現代語古典語助詞助動詞詳説』學燈社、1969年

川端善明（1958)、形容詞文、『国語国文』27-12、1958年12月

川端善明（1963），助詞「も」の説―2心もしのに鳴く千鳥かも―,『万葉』48,

1963年 7月
近藤要司（1997）『源氏物語』の助詞カナについて『金蘭短期大学研究誌』28、1997年12月（近藤要司（2019）『古代語の疑問表現と感動表現の研究』和泉書院の第二部第二章に再録）
近藤要司（2009）、文末カモの詠嘆用法について、神戸親和女子大学『親和国文』第39, 2004年12月（近藤要司（2019）『古代語の疑問表現と感動表現の研究』和泉書院の第一部第一章に再録）
西田隆政（2012),『詠嘆」の終助詞「かな」再考―「源氏物語」を資料として―,『武蔵野文学』, 60,2012年12月10日
西田隆政（2013),「源氏物語」での「けるかな」の用例の検討,甲南国文,60巻、310-301

注

1．以下、形容詞と形容動詞を併せて「形容詞」と呼ぶ。

2．両資料の全体の語彙量について比較するのは困難だが、「日本語歴史コーパス」でそれぞれの動詞の総用例数を検索すると、『源氏物語』は101,649例、『今昔物語集』は、105,581例でほぼ拮抗している。そこから考えて、ほぼ同じような語彙量を持つ資料と考えた。

3．この表では、「活用語カナ」の例については、和歌に用いられたものと和歌以外に用いられたものは分けて考えている。和歌は、古い表現類型を残す可能性が多いからである。

4．必要に応じて、前後の文脈などの説明も付したが、これは近藤によるものである。

5．近藤（1997）では、この情意評価の語が表現の中核を占めているという点を体言カナと活用語カナの共通点として、指摘している。

6．ここでいう情意評価の語は情意や評価を表す形容詞、および、「げに」のような情意や評価を副詞である。

7．「戯れにくし」という表現自体は、古歌からの引用。

8．１例詠嘆の「も」が付いていない例があるが、存在文の形になっている。「宮のいとあやしく恨みたまふことのはべるかな。（椎本）（薫が宇治の姫君大君に訴えて）「兵部卿宮がまったく妙なことに私をお恨みになることがございましてね。」

9．類型他の中には、近藤（1997）で示したように、解説説明に用いられた「連体形終止の文」と非常に近いものになっている用例も見られる。西田隆政（2013）は、『源氏物語』の活用語カナのうち「～けるかな」に特に着目し、精査した論文だが、この中で、この情意評価の語が見られない活用語カナの中について再検討して、「かな」について「話し手の何らかの「情意的な確認」の意味と解す可能性もあるのである。」という注目すべき意見を提出している。

10. 『今昔物語集』の原文は漢字片仮名交じり文なのだが、読みやすさを優先して、本論では用例を漢字平仮名交じり文で示す。

11. 連用修飾直下ではないが、文中に詠嘆「も」がある例が１例ある。

12. 小学館新編日本古典文学全集の例には1例「年来哀れに思ふ妻を出してむ、有べきかな。（巻16・第18）（36-p.218）」という例があるが、『新日本古典文学大系今昔物語集３』[12]（岩波書店）には、「この「可有キカナ」について、「可有キカ」との誤記か」とある。『新日本古典文学大系』の注に従って、この例は除外する。

13. 西宮一民著『万葉集全注　巻第７』有斐閣1984年３月の口語訳を参考にした。

14. 木下正俊著『万葉集全注　巻第20』有斐閣1988年１月の口語訳を参考にした。なおこの例は形式名詞の例ではないが、万葉には形式名詞の例がないので、この例をあげておく。

15. 小野寛著『万葉集全注　巻第12』有斐閣2006年５月の口語訳を参考にした。

16. 用例（45）のような、本稿の類型２にあたるタイプである。

17. 先に紹介した西田（2013）の「情意的な確認」をこのような方向で理解する。